

研究区分	教員特別研究推進 国際共同研究・国際交流の促進
------	-------------------------

研究テーマ	米国の小児専門病院の視察における国際交流に関する研究 —米国の小児看護に関わる医療者との交流によって日本の重症心身障がい児看護の質の向上に貢献する—				
研究組織	代表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	池田 麻左子
	研究分担者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発表者	所属・職名	看護学部・助教	氏名	池田 麻左子

講演題目
重症心身障がい児看護の質の向上への示唆 —北米の病院・施設見学および医療者との交流を通して—
研究の目的、成果及び今後の展望
【研究の目的】 北米の医療・福祉施設の視察および医療者との交流を通して、重症心身障がい児（以後、重症児）看護への知見を深めることを目的とした。 【成果及び今後の展望】 下記の①～③の3つの目標を基に、研修に取り組んだ。 成果 「目標①：重症児の療育の実際や課題を知る」について 法や地方施策によって、障がい児・者の医療や福祉サービスが整備されている日本と異なり、北米では、寄付によって、主に貧困家庭に対する支援が行われていた。急性期病院を退院後、在宅生活へ移行するまでの中間的役割を担う施設があり、日本における重症児・者施設と同じような機能や設備を備えていた。貧困世帯を対象とした療育支援機能を担っていたが、家族の療育能力や自立意識の未熟さなどが、在宅移行の妨げとなっていた。対象児自身の身体的安定を図るとともに、保護者の療育能力の育成が子どもの生命を守るための課題であった。 「目標②：重症児への看護教育体系や実践を学ぶ」について 重症児看護には、アドバンスな看護実践と療育能力が必要とされる認識は、日本と同様であった。広域にわたる北米においては、各地域間の看護の標準化を課題とし、オンラインでの教育体系が組まれていた。看護大学の教員らも構成員となり、現在は世界にその教育が共有されていた。ただし、日本は、まだ誰も参加していないということであった。 「目標③：高度看護実践者の活動を知る」について 小児看護NP1名、家族看護NP2名、スクール看護師1名と交流した。自費（自由）診療体制の北米においては、医療機関の受診をしない（できない）現状も珍しくなく、貧困社会の現状を反映していた。高度看護実践者による家庭訪問によって、高度な観察と異常の早期発見ができていた。さらには、保護者への育児指導教育による予防的健康管理実践が課題となっていた。また、子どもの成長発達に合わせた自立支援が、スポーツ活動を介して、社会と高度看護実践者が協働して行われていた。 今後の展望 重症児に必要な看護実践や役割に差異はなかった。日米の共通した課題として、障害と共に成長発達する重症児の成人期移行支援が挙げられた。子どもができることを妨げない親役割への教育や役割行動する場の提供も必要であり、社会や行政と協働した仕組みの構築が求められる。これらの実現には、重症児や発達障害など小児のアドバンスな状態への対応や親の心理的不安や行動へのサポートが重要になる。高度看護実践者による観察力や指導能力による予防的な判断は、親が安心して行動する強みとなり、重症児が他者と共生できる社会づくりは、重症児看護の発展に不可欠であると示唆された。